

## ヒロシマの被ばく者笹森恵子さんが

## チェルノブイリ被ばく者、ナターシャさんに会いに行く

菅 聖子

2005年8月。夏のチェルノブイリ訪問は、笹森恵子さんに同行することになりました。最初に笹森恵子さんにお会いしたのは、出発の5日ほど前。待ち合わせの場所で、私は軽い衝撃を受けました。

ヒロシマの被ばく者。

しかも爆心地で大やけどを負った70代の女性。

そう聞いて想像していた何十倍、いや何百倍も明るくてパワフルな人が目の前に現れたからです。少しおしゃべりしただけで、こちらまで元気がわいてくる感じ。重荷を抱え、60年を生き抜いてきた彼女のオーラは、強くてとてもあたたかでした。

60年前、広島に原爆が落とされたとき、笹森さんは13歳。

激しい閃光と轟音の後、意識不明の数日を過ごし、奇跡的に一命をとりとめたものの、顔や手足にはひどいやけどの痕が残りました。何十回にもわたる手術。23歳のときには「原爆乙女」25人に選ばれて、治療を受けるために渡米。それがきっかけとなってアメリカへ移住。そして、異国で准看護婦として働き続けてきたのです。

今でこそ穏やかに笑う笹森さんですが、この60年の間にはどれほどの涙を流したことでしょう。しかし私の問いかけに対し、彼女はこんなふうに語ります。

「考えても仕方がないことは、落ち込んだってしょうがない。だから私は、やけどの顔や手を隠そうと思ったことは、一度もないんよ」

被ばくの現実を受け入れ、前へ前へと歩んできた笹森さんが、戦後60年となる今年、自らチェルノブイリ行きを望みました。

「同じ被ばく者として、チェルノブイリの人たちと心を響き合わせたい。戦争や核のない平和な世界を目指すため、一緒にメッセージを発信できたら……」

それが、ヒロシマの証言者として全米各地で講演を行う、笹森さんの切なる願いでした。



笹森さん

夏の光がまぶしいベラルーシ共和国のゴメリ市で、笹森さんはナターシャ・コバレバさん（51歳）を訪ねました。

ここは、チェルノブイリ原発から130kmの地点です。20年前の事故によって、ベラルーシは国土の3分の2が放射能で汚染されました。そして630の市町村に避難勧告が出され、非汚染地域に移り住んだ人は100万人以上にのぼると言われています。中でも、もっとも大きな被害をこうむった地域が、ゴメリ州でした。

ナターシャさんは、7年前に甲状腺がんで息子さんを、半年前には胃がんで娘さんを亡くしています。しかし、深い悲しみの中にあっても、重い病気や障害を持つ人が共に働く工房を運営する女性です。



ナターシャさん

ナターシャさんの工房「のぞみ 21」を訪ねた笹森さん。隣に座ってかたく手をにぎり合い、二人は語り始めました。

**笹森**——娘さんを亡くされたばかりだと聞きました。

**ナターシャ**——インナは、今年の2月11日に5歳の娘を残して亡くなったんです。31歳でした。

**笹森**——まだまだ、気持ちが晴れないですね。

**ナターシャ**——ええ。娘は胃がんだったのですが、発見されたときには全身に転移していて手術さえできない状態でした。

私の自宅で、私の腕の中でインナは息をひきとりました。孫のナタリアが怖がらないよう、ショックを受けないよう、「ママは眠っている」という雰囲気を作りました。私は孫のために、懸命に涙をこらえたのです。だからでしょうか、半年たってもまだ、一人になると突然涙が出てくることがあります。思い出すことさえ苦しくて。

日本の人は、いつも自分たちの気持ちを抑え、泣きたいときにも泣かないと聞いたことがあります。しかし、私たちスラブ人は感情表現が豊かな民族です。チェルノブイリにまつわるいろいろなことを思い出すなら、私は涙が止まらなくなるかもしれません

## ●事故と子どもの死の関係はわかりません。でも……。

**笹森**——チェルノブイリ事故が起きたときも、この町に暮らしていたのですか？

**ナターシャ**——そうです。私たち夫婦と子ども2人の家族4人で暮らしていました。インナは12歳、息子のオレグは9歳でした。実は、オレグは事故が起きる3年前に悪性リンパ腫にかかったんです。でも、レニングラード（現サンクトペテルブルク）で治療を受けて、とても順調に回復していました。ところが、86年の秋に病気がひどく悪化してしまいました。

**笹森**——事故が起きた年ですね。そのために、ひどくなったということですか？

**ナターシャ**——それはわかりません。しかし、血液検査の数値が治療前と同じくらいになり、ドクターからは「また病気が始まったようだ」と言われたのです。そして「汚染地域には暮らさないほうがいい」とアドバイスを受けて、私と夫は、ロシアとヨーロッパの国境にある町へ引越すことに決めました。しかしちょうどそのころ私の父が亡くなったため、引越しを先延ばしにしているうち、ソ連邦が解体し、移住ができなくなったのです。

**笹森**——その後、オレグ君の体調はどうだったのですか？

**ナターシャ**——化学治療やサポート療法でたびたび入院しましたが、徐々によくなっていきました。そして、息子が大学進学をするか、就職かという岐路に立ったとき、この工房を開くアイデアが浮かんだのです。私とオレグは、同じような病気で苦しんでいる子どもや、悩みを抱えるお母さんたちと知り合っていました。その人たちが、治療を続けながら能力を発揮できる場所を作ろうと思ったんです。

95年に工房「のぞみ 21」スタートした時は、子どもたちがチェスをしたり絵を描いたりして好きなことを楽しむ場でしたが、そのうち洋裁や刺しゅう、木工などの生産活動を始めました。稼ぎは少ないけれど、みんなが力をあわせて何かを生み出し、自信を取り戻す場所になっていきました。オレグはゴメリ国立大学に入学しましたが、得意な絵の才能を生かして工房の指導者としても活躍

し、元気に暮らしていたんです。

それなのに、今度は甲状腺がんがオレグを襲いました。気づいたときには、すでに肺に転移していたのです。治療のいかなく、息子は21歳で亡くなりました。

**笹森**——私自身、2年前に大腸がんの手術を受け、最近では甲状腺がんがあることもわかって、原子爆弾の恐ろしさを感じ続けています。二人のお子さんのことは本当につらいと思いますが、チェルノブイリ事故との関係をどうお考えですか？

**ナターシャ**——病気の原因が何だったのかは誰にも証明できません。でも、この地域では若い人たちが本当によく亡くなるのです。ここは汚染地域なので、まったく汚染されていない作物を作ることにはできません。長年それを食べ続ければ、健康に悪影響が出ることは、素人でも予測できます。体によくないとわかっているにもかかわらず、私たちは自分たちの農産物を食べていくしかないんです。

### ●できることなら娘の苦しみを代わってあげたい

現在、工房「のぞみ21」には、病気や障害などで働くことができない若者たち約30人が通っています。テーブルクロスや鍋敷きに刺しゅうをしたり、ペン立てやまな板などの木工製品を作ったり、民芸品の人形マトリョーシカに絵付けをしたり、それぞれが得意な分野で自分のペースでコツコツと仕事をしています。スタッフの体調管理に目を配り、お昼ごはんを用意し、作業がうまく進んでいるかすみずみまで目を配るナターシャさんは、みんなのお母さんみたいな存在です。

**笹森**——ご自分の大変な苦しみを抱えながら、それでもナターシャさんがここで活動を続けられているのは、同じようなお母さんたちの痛みを感じているからなのですね。



寄り添うふたり

ナターシャ——やはり、子どもの病気や死というものは、母親をとて苦しめます。

笹森——私は60年前、原爆で大やけどを負いました。両親もきょうだいもみんな広島にいたので放射能は浴びていますが、やけどを負ったのは私だけだったんです。私は、このやけどが自分だけでよかった、家族が誰ひとり死んでいなかったことがうれしかった。

今、お話をうかがっていると、ナターシャさんの思いが私の母に重なるんです。母が、私のことをどれだけ思ってくれていたか。できることなら娘の苦しみを代わってあげたいと思っていたはずですが、でも代わることはできない。そんな母の気持ちを、今また走馬灯のように思い出しました…

（涙を流し、強く抱き合うふたり）

ナターシャ——笹森さんの運命も、楽ではなかったでしょう？ 女性としても、顔にキズが残ったことは本当につらかったと思うのです。でもそれを乗り越えられていますね。

私自身はまだ、どうして二人の子どもが亡くなったのか、どうして私の運命はこれほどつらいのか、理解できていません。でも、この工房が今の私に力を与えてくれていることは確かです。ひとりぼっちで苦しんでいては、気が狂ってしまったでしょう。悲しみを体験した人は、一緒に寄り添うことで少しだけ楽になるのかもしれない。

笹森——よくがんばっていますね。

ナターシャ——ありがとうございます。以前の私は、他の人たちの苦しみや問題を、頭では理解していたつもりでしたが、本当にはわかっていなかった気がします。でも、自分の子が亡くなってから、人はお互いに助け合うべきだと身に染みて感じるようになりました。今は、工房で働いている30数人の人たちに対して、責任もあります。これは私の使命であり、運命だと思うのです。

笹森——それに、たった一人のかわいいお孫さんナタリアちゃんが、あなたを必要としていますよ。ナターシャさんにとってお孫さんは、娘であり、息子であり、すべてなのだと思います。私も、同じ年の孫がいるから、かわいいのはよくわかる。孫のためにも、お互いがんばらなければね。

## ●共感できる人がいれば、苦しみも乗り越えられる

ナターシャ——笹森さんは、なぜアメリカに行かれたのですか。ご家族の反対はなかったのでしょうか？

笹森——アメリカのジャーナリスト、ノーマン・カズンズという人が、取材で訪れた広島で被爆の現実に衝撃を受け、日本とアメリカの心ある人たちから集めたお金で、25人の「原爆乙女」をアメリカに招いてくれました。

アメリカに対しては、好きとか嫌いとか、原爆を落とした国だから行きたくないとか、そういう個人的な感情はありませんでした。それよりも治療を受けるチャンスだと思ったんです。

もうひとつの理由は、年ごろになった二人の姉に縁談が来ていました。次は私の番でしたが、当時の私は眉も抜け、唇はめくれて化けものようだったんです。でも、私自身が悲しんだら、母はもっと悲しむでしょう？ 毎日私の顔を見なければならぬ、親のつらさを思いました。アメリカに行けば、そんな思いをさせなくてもいい。遠くで幸せを願ってもらおうほうが気が楽でした。

ナターシャ——女性として、とても苦しい思いをされたのですね。

笹森——父が「おまえと同じくらい親が長生きできるわけではないのだから、行きたいのなら自分

で決めなさい」と言ってくれたことも大きかったです。

ナターシャ——いいご家族ですね。笹森さんもやはり、多くの人に囲まれてきたのでしょうか？

笹森——その通り！ 私は、まわりの愛情によって生かされてきた気がするんですよ。家族や友だちはもちろんですが、広島教会の牧師さんや、アメリカでもステキな人との出会いに恵まれました。

特にノーマン・カズンズは、笑顔でいることの大切さを私に教えてくれた人です。アメリカで特別扱いされることなく、普通に受け入れてもらったおかげで、私自身は恨む気持ちも持たず、ラッキーに生きてくることができたんです。だから、人々の笑顔を見るのが私の幸せ。そう思って、今は生きています。赤ちゃんや子どもの無心な笑顔が私の先生なの。

親になって、孫ができて強く感じるの、やはり命の大切さです。そして、戦争をしてはいけないということ。あれほど多くの人が原爆で亡くなったのに、私が生かされているのは、神さまから使命を与えられているからだと思うんです。だから生きている限り、戦争の恐ろしさを語り伝えたい。戦争が起きたら大事な人の命がなくなるのだとわかってほしい。生き残った私にできる仕事はこれしかないと思っています。

ナターシャ——つらい運命を乗り越えられたからこそ、笹森さんにはやさしい心が残ったんですね。オプチミストで、とてもエネルギーが豊富。あなたのパワーを感じます。

笹森——もし、やけどをしていなかったら、どんな人生だったかな、と時々思うんですよ。やけどによって外見は失ってしまったけれど、でも、内面には多くのものを得ることができた。そう思っているのよ。

ナターシャ——今日は、笹森さんが私の手を取りなぐさめてくださって、とてもうれしく思いました。今はまだ、苦しくて胸が痛いんです。でも、笹森さんと同じ苦しみを分かち合うことができました。



ゴメリ郊外にて：ナターシャさんのお孫さんと

した。すべての人がお互いを尊重し、共感し合い、理解するよう努力して歩んでゆけば、戦争も起こらなくなるでしょう。そして、世界中の人と思いを分かち合えれば、多くのことを乗り越えられると思っています。



その夜、ご自宅を訪ねた私たちを、ナターシャさんは心づくしの手料理でもてなしてくださいました。娘のインナさんや息子のオレグ君の写真を見せながら、思い出話は尽きることはありません。言葉の端々に、自慢の子どもたちであったことが感じられました。

別れ際、「あなたと会えてうれしかった」と笹森さんがナターシャさんに言うと、「私もよ、本当に」と言って二人はかたく抱き合いました。

苦難の道を歩む途中で、引き寄せられるように出会った笹森さんとナターシャさん。住む場所も年齢も気質もまったく違うのに、彼女たちには確かな共通点がありました。

前向きに歩もうとする気持ちの強さ。惜しみなく人のために働くところ。そして、家族や周囲に向ける愛情の豊かさ。私はその様子をそばで見ながら、言葉は通じなくても、彼女たちが深い部分で通じていることを知りました。共感や、慈しみや、励ましが、無言の抱擁から伝わってきます。

「がんばりましょうね」

「そうよ、がんばらなくちゃ」

笑いながらガッツポーズをし合う二人の頬には、涙が光っていました。

### ささもり・しげこ さん

1932年広島生まれ。13歳のときに広島の爆心地近くで被ばく。4日間意識を失っていたが、5日目に母とめぐり合って生きのびた。23歳のとき渡米して治療を受けたのを機にアメリカに移住。現地で准看護師の資格をとって働き、結婚、出産。現在はお孫さんを持つおばあちゃんでもある。広島の証言者として、アメリカで講演活動も行う。

### ナターシャ・コバレバさん

1954年ベラルーシ共和国ゴメリ州生まれ。チェルノブイリ事故当時32歳、病気や障害を持つ人のための工房「のぞみ21」を夫と共に運営する。98年に息子オレグさんが甲状腺がんで、05年には娘インナさんが胃がんで死亡。現在は夫のステパンさん、孫のナタリアちゃんと暮らす。

注：本稿は、「通販生活」2006年春号に掲載された原稿に加筆したものです。